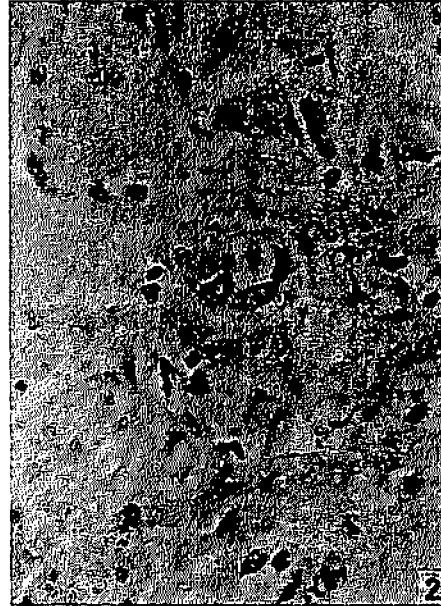


犬の気管支癌

宮崎大学農学部家畜病理学教室出題 第13回獣医病理研修会標本 No.189



標本：犬の肺。動物：犬，雑種，雄，9才，体重15kg。
1972年12月20日午前11時死亡，同日午後剖検。

稟告：斃死する2～3年前より発咳が著しく，1か月位前より食欲減退，時々嘔吐する。1週間位前より流動食しか受け付けなかった。ほとんど獣医師の診療を受けていない。

肉眼的所見：肺には全面にわたり小豆大からクルミ大の乳白色の腫瘍密発し，一部ではこれが融合して鶯卵大の腫瘍塊となる。剖面も同様所見で，左右とも尖心葉はほとんど腫瘍塊に占座され，横隔葉にわずかに含気部を認めるのみである。縦隔膜・横隔膜にも肺と同様の米粒大腫瘍を数個認めた。また肝には粟粒大ないし米粒大の腫瘍を散見した。腎には左右とも小豆大ないしそら豆大の腫瘍各々10数個を認め，前立腺には米粒大ないし小豆大の腫瘍を数個，甲状腺には小豆大の腫瘍1個を認めた。これらの臓器の腫瘍は組織学的に肺の腫瘍とほぼ同様の所見を呈した。その他，心および心基底部分大血管，消化管，脾，副腎，精巣および脳には肉眼的，組織学的に腫瘍性病変は認められなかった。

組織学的所見：肺の腫瘍は正常部との境界明瞭で，中

心部はほとんど壊死する。腫瘍細胞は極めて多形性を示し，大部分の腫瘍細胞は核仁・染色質が明瞭で，原形質が豊富な大型の細胞が不完全な腺構造を作ったり，肺胞様構造の中に脱落するとき像を呈するなど（写真1），比較的疎に配列するが，場所によっては腫瘍細胞が密に充塞することもある。また，線維成分に富み，腫瘍細胞も紡錘形を呈する小部域（写真2）や，これらの移行型の部分もみられる。この様な腫瘍細胞中には多核巨細胞を散見し，核分割像を頻繁に認める。

肝臓の腫瘍は比較的結合織の増殖が多くみられるが，主成分をなすのは肺にみられたと同様の腫瘍細胞であった。腎臓・前立腺にみられた腫瘍も肝と同様比較的線維成分に富む。甲状腺にみられた腫瘍は大小種々のコロイドを容れた濾胞の間を腫瘍細胞が埋めており，濾胞上皮細胞の核は限界明瞭で小型であり腫瘍細胞のそれと明らかに区別でき，甲状腺の腫瘍が転移巣であることを示す。

以上の所見より，肺胞上皮癌，甲状腺腫瘍の転移巣等も疑えるが，不完全ながら腺腔を形成する部分があることから，多形性を示す気管支癌とすべきであろう。